



ペタンク夜話で伝説のプレイヤー達を紹介したところ好評で、ぜひ続編をと言う要望が多い。話の出処は夕食時のRaluyさんの思い出話だから、昨夜も誰か有名なプレイヤーの逸話を紹介してくれと頼んだところ、またもベベール・ド・カーニュ Bébert de Cagneの話になった。彼はRaluyさんが一番敬愛するプレイヤーであり、Raluyさんの著書『PÉTANQUE』の中でプレイヤーを紹介する章があるが、そこで一番に紹介されているのがベベール・ド・カーニュだ。どうしても彼の話が一番多くなる。



『PÉTANQUE』クロード・ラリュイ著 (hachette社)

またベベールか！と言わずに、もう一話聴いてもらいたい。この話を聞けば何故Raluyさんが彼を尊敬するのかわかると思う。

《ある大会での出来事》

ダブルスの試合でベベール Bébertのチームは10対11で負けていた。相手の投球は終わり、ベベールは最後の2投のうち最初のポワンテで得点した。その時のテランは次のようだった。

ビュットの両脇の黒ボールが相手チーム。

ビュットの手前の白ボール2個はベベールのチーム。ビュットの先にある白ボールはベベールが今ポワンテした。

さて、あなたがベベールならどうするか？

常識的なプレイヤーならもう一度ポワンテして得点を2点にし、12対11と有利にして次のメーヌを迎えるだろう。

しかし、テランを見ていたベベールは最後の一球をティールすると言う。

それもビュットの先にある自分のボールをティールすると言い出したそうだ。

パートナーは驚き、反対した。



何故なら。彼のティールが彼のボールを弾き出せば相手が2得点して10対13で試合終了となる。

カローになったとしても1得点のままだ。

ティールすることになんの意味があるんだ！とパートナーは言った。

しかし、ベベールは頑として譲らない。

とうとうパートナーは泣き出しそうになって、近くの街灯にしがみついて天を仰いだそうだ。

さて、そうしてベベールの投げたティールはどうなったのか？

彼の投げたボールは**猛烈な逆スピン**でビュットの先にある彼のボールの真芯に当たり弾き出してカローになり、そして逆スピンの効いて後ろに転がり、ビュットを伴って手前にある味方の2個のボールのところまで戻って来たという。

こうして、**3得点**し。13対11で彼のチームは勝った。

確かに素晴らしいプレーだが、皆さんどう思われましたか？

常軌を逸している？ そう思われたでしょう。私も同じ意見を言いました。

Raluyさんは頷きながら私の顔を見て、

”しかし、それが彼の世界だったよ！ C’ était le monde de Bébert !”

と感慨深げに締めくくったんです。